

	こいそ まりこ
氏 名	小磯 まり子
学位の種類	博士（国際コミュニケーション）
報告番号	甲第6号
学位授与年月日	令和5年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条、武蔵野学院大学大学院学則第20条第2項及び学位記授与に関する規程第3条第3項の規定による
学位論文名	栄西『喫茶養生記』における「桑」効能記述由来の考究—日本桑の食用歴・実用歴・薬用歴を考察の上で—
論文審査委員	主 査 武蔵野学院大学 教授 高橋恵美子 副 査 武蔵野学院大学 教授 佐々木 隆 副 査 武蔵野学院大学 教授 林 猛

## 論文の内容の要旨

本論文は、「茶桑経」と称されて、茶における流れが大きな変革の端緒となった、『喫茶養生記』（1211）の喫茶養生について論じるものである。その茶と桑による養生を提唱した最初の人物が栄西禅師（1141－1215）である。『喫茶養生記』は、上下二巻から構成され、初治本（1211）と再治本（1214）がある。『喫茶養生記』巻下には、茶に並ぶ人体機能に影響を有する植物として、桑の効能及び摂取方法が記されている。本研究では、『喫茶養生記』における「桑」効能記述由来を明らかにする事によって、『喫茶養生記』研究の学術上の必要性、伝統文化の社会性を認識し、栄西禅師が唱えた『喫茶養生記』の文化的価値と学術的知見の考察を目的とする。

「第一章 『喫茶養生記』と栄西」では、『喫茶養生記』の成立について述べ、「茶桑経」と呼ばれた中世の『蔗軒日録』から、当時の禅宗寺院で『喫茶養生記』が実践されていたことを考察する。

さらに栄西の入宋中の動向による栄西の実績から栄西の思考を観察する。

「第二章 日本における「桑」と日本桑「ヤマグワ」（食用歴・実用歴）の考察」では、『喫茶養生記』以前における、「桑」効能の記載関連情報を得るために、日本歴史上における「桑」の存在（食用歴・実用歴）を考察し、本研究の目的における「桑」の土台とする。日本桑「ヤマグワ」については、原始の「木の葉石」化石、その他の旧石器時代における「ヤマグワ」、縄文時代の遺跡出土植物からのクワの実の多量出土によって、果実酒か薬用の議論がされていること、また、縄文人の森林資源利用管理によって、「ヤマグワ」

が活用されていたことが確認された。さらに吉野ケ里遺跡の古代絹の出現によって、養蚕文化の歴史を考察する。中国における養蚕の礼儀と習慣を参考にして、日本の神話にみる養蚕起源から、日本における親蚕と儀礼と文化の根源を考察する。

「第三章 日本における「桑」と関連物における薬用歴の考察」では、奈良文化財研究所「木簡庫」、正倉院文書に見える「献物帳 種々薬帳」、『延喜式』典薬寮における「桑」と関連物における薬用的考察をする。さらに『本草和名』、『医心方』、『長生療養方』から「桑」関連物における薬用的考察をする。

「第四章 『喫茶養生記』における「桑」効能記述由来の特定」では、「桑」効能記述由来の特定において、『喫茶養生記』先行研究者森鹿三研究の補注・解題のまとめと、『喫茶養生記』における「桑」効能記述に引用された可能性がある中国文献から考察する。本研究の目的である『喫茶養生記』における「桑」効能記述に引用された可能性がある中国文献を選取し分類した。そして、栄西の提唱する近年の五種の病相と「桑の養生法」について、森鹿三研究の成果に対する筆者の見解を論述する。

「第五章 『喫茶養生記』における「飲水病」の名称の考察」では、「飲水病」という症例についてその由来を探り、「飲水病」に併発する「二禁」についてあわせて考察した。平安貴族の日記にその症状と共に、「水を飲む」「水を飲む病」という様な種々の表現が出現している。このように平安貴族の日記『御堂関白記』『小右記』『権記』『台記』における四者から考察した結果、「飲水」「飲水病」「飲水之病」というような表記があるのは『小右記』で確認できた。『御堂関白記』『権記』『台記』からは「飲水」にあたる表記が見えないことを確認した。さらに、「飲水病」「二禁」の表記があるものは『中右記』で確認できた。当時の貴族の信仰、日常生活、中国文献の愛読書、体調不良においては、薬や灸に頼っていた様子が窺える。多くの平安貴族達が多忙極まりない職務で体調不良を訴えている。体調不良の対処方法として、当時は祈祷によって障りを排除するための役割を僧侶が担っていたことが窺える。

「第六章 「桑」関連の本草と本草の思潮」では、本草についての思考を、日本における「桑」効能記述の概要を『古事類苑』から考察し、日本の養生書の概要をまとめた。これらの情報源は殆どが中国の由来であるため、中国本草の概要から、『神農本草経』に見える「桑」関連物とその養生法について考察した。栄西は、「桑」の効能由来について、「唐医口訣」「新渡医書」「宋朝医口伝」を挙げている。そこで、中国の本草の概要を『証類本草』と『新修本草』からまとめ、考察をした。日本と中国の歴史において、東洋思想のグローバル思潮と、最も自然になじめたのは、養生文化を基源とする思潮にあったからではないかと考察する。

結論としては、可能な限りの調査で、『喫茶養生記』の本文内容を基にして、「桑」効能記述由来の可能性が高いと思われる内容の特定を認定できたことである。

日本は、中国伝統養生医書の影響を受容し、その思潮と真摯に向き合い、『本草』の重

要性を共有しながら生命を繋げてきた。批判的な検討が不十分であったからこそ、稚拙ながら、これまでの反省として養生の思潮の原点を探り、身近な本草の研究において、後進の関心に、その橋渡しをすべきであろうと考える。

本研究では、「桑」が日本伝統文化の起原をなし、栄西禅師が唱えた「喫茶法」の真価から、『喫茶養生記』の文化的価値と学術的知見を得て、さらに、中国伝統医学に真摯に向き合い、「桑」が、日本人の生命線となって、伝統文化を育む礎となった「喫茶養生」を、今後の養生文化研究の課題としたいと考えている。

## 論文審査の結果の要旨

臨済宗開祖である栄西が著した『喫茶養生記』は、長らく禅師の「茶祖」たる側面から茶の湯文化の継承において取り扱われてきた史料である。近年、その書名にある「養生」の側面からの再検討がなされ、中世における「茶」の評価と認識について再整理が行われている。

本研究は同書を構成するもうひとつの柱である「桑」の記述に焦点をあてたものである。『喫茶養生記』は上下巻からなり、上巻に「茶」の歴史とその典拠、下巻に各種の病状に関する記事と「桑」を活用した療養食の調理法、ならびに「喫茶法」の記事を収載しているが、下巻の内容について「喫茶法」に比較するとこれらの「桑」や病状に関する記事はこれまで注目されることは少なかった。そこで本研究では、栄西が注目した「桑」について、日本における在来種「ヤマグワ」の諸用歴を確認するとともに、『喫茶養生記』に「桑」の記述がなされるに至る経緯と、当時の諸史料から「桑」や「桑茶」、ならびに「桑粥法」などがどのように扱われ認識されていたか、また栄西自身が、「桑」関連記事の記述にあたりいかなる文献を参照していたかを、日中両国の古文献から探り、加えて後世「桑」が本草学の視点からいかなる評価を得ていたかについても触れている。

筆者は日本における「桑」の自生状況を把握するため、各地の発掘報告書の蒐集を進める一方で、中国古典籍および日本の古記録の蒐集、整理、検討を行い、『喫茶養生記』における「桑」記述に関する史料の特定をはかることとなったのである。

なお本論は全六章から構成され、これに参考表などが加わる。そこで以下に本論の章立を掲げ、その概要を記すことにしたい。

### 序論

#### 第一章 『喫茶養生記』と栄西

#### 第二章 日本における「桑」と日本桑「ヤマグワ」(食用歴・実用歴)の考察

#### 第三章 日本における「桑」と関連物による(薬用歴)考察

#### 第四章 『喫茶養生記』における「桑」効能記述由来の特定

第五章 『喫茶養生記』における「飲水病」の名称の考察

第六章 「桑」関連の「本草書」と本草の思潮

結論

序論では、『喫茶養生記』がこれまで主に「喫茶」の側面からのみ注目されてきた現状を踏まえ、「養生」への関心が少なく、研究も個別分野的になされてきた点を指摘し、「喫茶」と「養生」との関係について再検討する意義について述べている。

第一章では『喫茶養生記』がかつて「茶桑経」と呼ばれていたことを示す古記録に注目し、『蔗軒日録』の記事から中世寺院における『喫茶養生記』の受容実態を明らかにした。また『喫茶養生記』成立前史ともいべき栄西の二度の入宋についても触れている。

第二章では、日本に自生する「ヤマグワ」の食用歴および実用歴について、各地の発掘調査報告書をもとに考察する。クワの実の多量出土と当時の人々の森林管理状況から「ヤマグワ」が全国的に活用されていたこと、また古代絹の存在を通して、古代日本における養蚕の歴史についても言及している。

第三章では、『喫茶養生記』における「桑」記述にも繋がるであろう「桑」の薬用歴について、木簡や正倉院文書、『延喜式』・『本草和名』・『医心方』・『長生療養方』などの古記録類から「桑」に関する記述を抽出し考察している。

第四章では、『喫茶養生記』の校注訳者でもある森鹿三氏の補注ならびに解題に対し、本書における「桑」効能記述部分に関する典拠史料の特定という視点から再検討を行う。栄西が二度の入宋後に『喫茶養生記』を著していることから、特に影響が大きいと考えられる中国文献を中心に考察している。

第五章では、栄西が『喫茶養生記』において言及している「飲水病」について、その症例と名称の由来について探る。平安時代の貴族の日記に散見される「飲水病」「二禁」などの表現から、当時の貴族社会において当該症例が珍しくない状況であったことを明らかにしている。

第六章では、『喫茶養生記』を養生書として捉えた視点から、「桑」の記述について本草学的考察を行う。『古事類苑』における「桑」の記述に注目し、その典拠となる中国文献に根付いた本草学に言及している。

結論では、以上の研究成果を踏まえて、『喫茶養生記』で栄西が述べている桑の効能の典拠史料について、森氏が特定する史料に新たに加えるべき中国文献を提示している。『喫茶養生記』本文中においては、栄西は「新渡医書」・「唐医口訣」・「宋朝医口伝」などといったように、記事の典拠について明言はしていないが、『喫茶養生記』が彼の二度の入宋以後に著されていることから、彼自身の入宋経験が大きく影響を及ぼしていることは明らかである。これは同時に、栄西が中国文献に触れる機会があったことも示すものであろう。

日本においても、原始古代より「ヤマグワ」種が人々の生活に利用され、桑の実や皮が

薬として用いられていた。また養蚕文化が形成される上で、桑は身近に存在する植物であったといえる。こうした距離の近さから、栄西が『喫茶養生記』において「桑」へ言及することとなった経緯もうかがえよう。

筆者はさらに栄西が「桑」をより「養生」に結びつけるものとして『喫茶養生記』に紹介した点を評価する。これが二度の入宋経験によって栄西が得た知見であり、当時の貴族たちを悩ませていた種々の病を具体的に記すことで、人々に「養生」の概念を広めようとした意図についても触れている。

審査会においては、引用史料の表記、典拠の書式の統一、表の作成方法など細かな点についていくつか指摘がなされた。また多くの先行研究との比較において、筆者の独自意見が控えめに記されている点については、今後の研究においてより明確に示されるよう期待したい。本論の研究手法・論文構成・論証内容について決定的な問題点の指摘はなく、その学問的な価値については審査委員一同評価するところであった。

以上の結果、本審査委員会は、小磯まり子 に博士（国際コミュニケーション）の学位を与える資格が充分あると認めることとした。